

児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察

～「語られない語り」への関わりの観点から～

井上 靖子
人間環境部門

Study of the mental state of people with experience in an orphanage, and support thereof

From the perspective of involvement in “unspoken narratives”

Yasuko INOUE

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo

1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract; This study aims to explore a clinical psychology approach towards people with experience in an orphanage, from the perspective of supporting the development of people from various backgrounds. The result of interviews by listening to these people’s narratives, and qualitatively analyzing two cases, is as follows: 1. Feeling their background as foreign, and fearing prejudice from others; 2. Narratives containing expressions of ambivalence or denial and evasiveness, making them seem difficult to understand and vulnerable. Narratives not explicitly verbalized are called “unspoken narratives.”; 3. “Unspoken narratives” don’t conform to social norms and systems. Coming from deep in one’s mind when the basis of existence is shaken, they emerge as the interviewer attempts to understand the interviewee’s mind. The clinical psychology approach of listening to these “narratives” deepens connections with the interviewee’s “unspoken narratives”, and is important for maintaining supportive relations. (140 words)

Keywords; the mental state of people with experience in an orphanage, the clinical psychological approach, unspoken narratives.

1. 問題と目的

児童養護施設を舞台にしたテレビドラマ『明日、ママはいない』が放映された。ところが、このとりのゆりかご^{註1)}を設置する慈恵病院、全国里親会、全国児童養護施設協議会など関係諸機関から、放送中止の要請を受けた。その事情は、番組内容に人権侵害があり、施設で暮らす子どもに配慮し、誤解をうまないよう細心の注意を払ってほしいとの理由からである。視聴した入所児童が自傷行為を行ったという事実をつきつけられ、厚生労働省が調査に乗り出す騒ぎになった。一方で、児童養護施設経験者の当事者からは、「社会的養護のことを広めるにはメディアの力は絶大で、当事者、施設の関係者、児童相談所など、いろんな人の意見を取り入れて、社会的養護に対する意識を広めるような報道をしてほしい」(奥

山・武藤他, 2014, 177 頁) という意見も述べられている。ドラマの内容と児童養護施設の現状が乖離しているという点、ドラマであるならフィクションであることを徹底してもよいのに、現実と区別しにくかったという点も指摘されている。概ね、児童養護の現状に対する理解不足があり、子どもの視点にたった認識は十分とはいえないのである。

こうした事態が生じるなかで、2013 年に児童相談所が対応した児童虐待の件数は 7 万 3765 件へと^{註2)}、一時保護所をはじめ、施設で暮らした経験をもつ子どもも増加している。一時保護所から家庭に戻る場合、学校や地域が子どもや心理的な問題を抱えた親をどう受け入れ、各現場で支えていくのかといった課題もある。こうした

現状のなかで、多様な背景を抱える人間の育ちをどう支えるのか、人が人との間で育ち、生き抜く力について検討することは、子どもの養育環境の全体において意味のある観点であろうと考えられる。こうした見地から、家庭に拠り所が乏しく、児童養護施設という守りからも離れざるをえない児童養護施設経験者が、どのような心理にあり、どのような支えを必要としているかについて語りを聴き取り、検討することに意義があろう。

そこで児童養護施設経験者や退所者の語りを通した先行研究を概観したい。まず、福祉団体や自治体が施設退所者に対して自己記入式のアンケート用紙を配布する調査を行っている。全国社会福祉協議会 (2009) の調査によると、退所者が感じる困難には、①就職や住宅の賃貸契約の際の保証人の確保、②ワーキングプアや派遣労働など貧困のビジネスの犠牲になりやすいこと、③孤立感の3つがあると述べている。施設経験者の孤立感に関して、自らの人生の異質性への意識があるために、自分のことをわかってくれる人がいない、人は信用できないといった思いを抱きやすくさせ、孤立感を増幅させるのだと分析している。施設経験者は退所した施設や職員には容易に頼れないという声を持つ一方で、いつでも相談できるという回答もする人もあり、「施設側に深く関与してほしくないが、かたわらに居続けてほしいという微妙なスタンスを維持する困難さ」(161 頁)があると指摘している。また東京都福祉保健局 (2011) が行った調査では、①雇用形態の不安定な状況、生活保護の高い受給割合にみられる経済的問題、②困ったときに親や家族を頼ることができない、相談できる人がいないといった生活上の課題や不安、③高校中退により就労自立が余儀なくされるという子どもが多く、大学進学の子どもの数が少なく、学業に関するハンディキャップを抱えている実態があると分析している。

心理臨床的観点からの分析として、国分 (2001) は、児童養護施設の 19 名 (中高生) と、卒園生 7 名に対して、施設生活での良き体験・影響者、自分の出自・家族への疑問、大人の在り方等の 15 項目についてインタビュー調査を行っている。その結果、子どもの育ち直りを支える要因として、①家族や職員が、心の拠り所として存在するかとといった基本的信頼感の獲得度、②自分の自信となる経験、自尊心の回復、③時間の共有と連続した生活体験・交流を通した人とのつながりを実感、④自分の出自と家族との葛藤への確認作業が必要であると述べている。また、両見 (2005) は、児童養護施設の卒園者 3 名に対してインタビュー調査を行い、得られた語りについて、物語という視点で捉えて、ナラティブ・ア

プローチの意義を検討している。そして、語るという行為やこれまでの出来事を意味づける活動が、①自己を連続性、斉一性を持つものとして感じる、アイデンティティの感覚、②他者との相互作用による自己についての主観的肯定体験、③新しい物語の生成として体験されると分析している。ナラティブ・アプローチは、過去の出来事そのものに焦点を当てるのではなく、語る活動を通して<今、ここ>における自己を肯定的に捉え、発展させていくアプローチであると考察している。

さらに様々な形で不利、困難な状況にある人々の生活を研究テーマとしてきた社会学研究者による調査も行われている。西田・妻木・長瀬・内田 (2011) は、12 名の施設経験者にインタビューを行い、生育家族、施設経験、学校経験と施設を離れてからの生活について自由に語ってもらい、あらかじめ用意している質問項目についても言及してもらおうという調査を 2005 年から 2007 年にかけて行っている。そして①生まれ育った家庭生活の特徴、②施設での生活、③施設から通う学校での生活について検討した後、④学歴取得と職業生活への移行の実態を検討している。調査から、①生まれ育った家族には、経済的困難、貧困、家族構成の不安定や不定形さ、親の疾病や障害、さらには虐待として表れる家族関係の困難さがあり、施設入所後もこうした困難さが継続、深刻化している、②施設での生活では、施設職員主導の日課やルール、プライバシーが保ちにくい実態、子ども同士の暴力を伴う威圧的な上下関係、子ども同士の連帯、施設職員との近い存在であるが、胸の内をすべて明かせるわけでもないアンビバレントな関係などの特徴があり、「仕方がないというあきらめおよび我慢とどう折り合えて生きるのか」(67 頁)という語りが見られたと述べている。③学校教育においても十分な支援を得られず低学力の傾向があること、大学進学率も低くとどまり続けていること、そのため、退所後の就職も、④アルバイトや不安定で単純労働市場への就労となり、「袋小路的」(143 頁)生活を強いられている。「生まれ育つ家庭がさまざまな資源に恵まれているか否かが子どもの人生を大きく左右し、頼るべき親がいない、いたとしても不安定な生活を強いられている場合には、子どもの現在の生活と将来が非常に厳しいものになってしまう」(198 頁)と述べている^{註3)}。このように西田 (2011) は、親を頼れる人とそうでない人を隔てる一線を、「家族依存社会の臨界」(198 頁)と呼び、日本社会の現実を「家族依存社会」とであると指摘している。「近年、「格差社会」、「貧困」という言葉が注目を集めているが、それは、臨界の外にはじき出された人々が急増している実態」(198 頁)を意味

していると述べている。さらに内田（2011）は、当事者の語りをもとに、施設生活者/経験者が肯定的アイデンティティの形成のためのプロセスについて分析を行っている。「自身が親元で暮らさない/暮らせないことを、社会的な背景を含めて納得していく、そして自らの立場を了解する物語を構築していくプロセスが、施設生活者/経験者にとって特に重要になる」（172頁）と述べている。

こうした研究者の立場からの調査のほか、当事者の自伝や声を集めた書籍も出版されている（子どもが語る施設の暮らし編集委員会, 1999, 2003）。渡井（2010）は、親からの虐待を受け、9歳から18歳までの施設で暮らし、退所した。「施設にいる時は、衣食住は保障され守られてはいたが、退所して社会に出ると本当に一人ぼっちだった。生きる希望が抱けないのに、何もかも自分で考え、行動しなくてはならなかった。人を求めることもできず、未来にも絶望していた。生きているのがしんどかった」（12頁）と述べている。こうした孤独から奮起して、大学に入学し、さらに当事者の支援団体を立ち上げ、新しい家族を持つこともできた。ようやく、幼少期より人間不信や絶望感を抱いていたが、「心を開けば、世の中は意外と温かい」（202頁）と思えるまでになった。だが、そこに至るまで父の飲酒や父の母への暴力、父母の離婚、施設の入退所の繰り返し、同世代との違いを意識させられる、父の孤独死、母に結婚式さえ出席してもらえないなど運命との壮絶な闘いが必要であった。「一生懸命に生きるから、早く終わりにしてください」（184頁）と願い続けて生きてきたという。こうした自伝を書くことについて、渡井（2010）は、文頭で、施設で暮らしていたことを他者に話すと、大抵「ごめんね、そんなこと聞いて」「大変だったね」と言われるため、「気まずい思いをさせて申し訳ない」（9頁）と感じてしまうと述べている。どれほど頑張っている、他者に向かって自らの生い立ちを語ることに複雑な心境があることを吐露している。また、18年間施設で暮らした中村（2012）は、「最も「血縁」を気にし、固定化された家族像に悩み続けていたのは自分だった」と驚き、「「血のつながりではない家族」のあり方を常に考え、それが社会に浸透していくことを願っている」（174頁）と述べている。このように、施設経験者は、頼れる家族がいらないために孤立しやすく、施設経験によって、他の人とは違うという異質感や疎外感を抱きやすい^{註4)}。当事者自身が自ら紡ぎだす言葉や語りは、親が子育ての担い手であるという常識や既成の物の見方や考え方を問い直していると考えられる。

以上をふまえ、本研究では、こうした多様な背景を抱えた子どもの育ちをどう支えるのかを探り、児童養護施設経験者に対する心理臨床的アプローチを明らかにすることを目的として、語り^{註5)}を聴くという方法を用いてインタビューの面談を行った。面談者と被面談者の関わりでやり取りされる語りに着目し、そして施設経験者の言葉の内容だけではなく、面談者の印象や受けとめを含めた語りの過程の分析を行った^{註6)}。そして(1)様々な経験を抱えている児童養護施設経験者の心理、(2)被面談者と面談者との対話のプロセスから見えてくるもの、(3)その心理臨床的な支援の在り方について検討していく。

2. 研究方法

2. 研究方法

(1)対象者の選択と限界

本研究において、児童養護施設経験者を探す段階で、その人が信頼している関係者を通して紹介してもらうという段取りを取った。それは面談による聴き取りが本人にとって心理的な侵襲にならないようにする配慮であるが、そのため、対象者がある程度、施設職員等などの繋がりや支えがあることを前提とする。その点で対象者の特徴が限られているという事実は分析上、考慮する必要がある。

(2)面談の状況

インタビュー調査は半構造化面談とした。約束の時間を事前にメールや電話等で決め、面談者が現地に出向いて行った。面談の場所はできるだけ落ち着いて話を聴ける場を選択した。時間は1時間程度を目安としたが、その経過次第で柔軟に対応を行うこととした。本研究の目的と意義、内容、プライバシーの保護、面談後の連絡先、面談を中断してもよいことなど心理的な配慮をした。質問内容であるが、年齢、家族関係、入所や退所の時期、退所後の生活など事実関係については本人及び施設職員等からも情報を得るようにした。面談の最初に①現在、児童養護施設経験者としてどのような気持ちで過ごしているのか、どのような支えを必要としているのか、②これまで、どのような支えがあったか、あるいは必要であったのか、③これから、将来に向けて、どのような不安をかかえて、立ち向かっていこうとしているのかを尋ねたうえで、被面談者の語りに共感しつつ、その時々の内容に応じて、応答や質問を加えながら進めた。なお、面談中の対話は、協力者の許可を得て、ICレコーダーやメモを用いて記録した。

(3)分析方法

分析は、川北(1967)^{註7)}のKJ法を用いたナラティブ分析を参考とした(やまだ, 2007)。その方法は次のとおりである。まず一次テキストは、ありのまま、できる限り録音内容を書き起こす。次に心理臨床の見立て^{註8)}の視点から心理や支えなどの意味内容で分けた二次テキストを作成する。二次テキストの見出しの相互関係性を図にして、三次テキストとして検討を行った。KJ法を用いた二次テキスト作成の際に、筆者以外に、児童養護施設における心理療法を30年以上経験してきた臨床心理士1名に見出しや表札づくりをお願いした。そしてその分析が適切かどうかについて相互の検討を行っている。

3. 事例の概要

本調査における2事例は、いずれも男性であったが、施設退所後の生活が長く、対人関係の多い事例とまだ退所して間もない時期で、対人関係が苦手な事例という対称的なケースとなった(Table 1&2)。なお、事例の概要について、プライバシーの保護の為、臨床的な真実を損なわない程度の変更を行っている。

Table 1. Case summary

	A氏	B氏
年齢	30代	10代
性別	男性	男性
職業	団体職員	パート
入所理由	父親不在、母親からのネグレクト	父子家庭、離婚
施設生活	9歳～18歳	5歳～16歳
退所理由	就職	家に帰りたい

Table 2. The method of interviews

	A氏	B氏
面談時期	X年10月	X年12月
面談場所	職場の事務所	児童養護施設の面談室
所要時間	3時間	1時間半
面談経緯	児童養護連絡協議会からの紹介	児童養護施設の職員からの紹介

4. 結果と分析

(1) 児童養護施設経験者の心理について～「語られない語り」の現出～

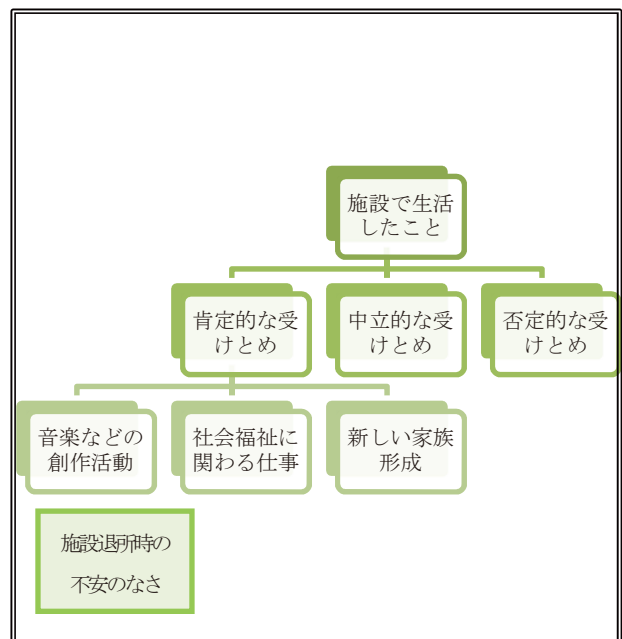
児童養護施設経験者であるA氏とB氏の語りの過程を

分析して明らかになったことは、A氏は両価的、B氏は否認・回避的な意味内容を持った語りがあり、それは、面談者に、面談者の心にすぐに腑に落ちない不透明さや心の傷つきとして感じられたことである。ここではこうした語りを「語られない語り」として検討したい。「語られない語り」には、「語りたくない」「今のところ、語りにくい」「語りかけたが、語りきれなかった」「語るに語り得ない」(渥美, 2004)が含まれる。それを具体的に検討する。

(2) A氏の語りから見えてくるもの

① A氏の語りにおける肯定的な受けとめと内なる支え

Figure1. The positive acceptances on self-understanding in narratives (Mr. A)



分析の結果、A氏の心理と支えの特徴は、内なる自己像と外なる人間関係において、肯定的もしくは否定的といった両価的 (ambivalent) に受けとめ、解釈している語りと感情の影響が少なく、中立的に事実を俯瞰している語りがみられた (Figure 1 & 2&3&4)。

さらに、肯定的、否定的や中立的な受けとめには該当しないが、施設経験者の心理として、施設退所時において、社会にでることに不安を持たなかったという語りを独立した項目として取り挙げる。A氏は、「(施設をでるとき)僕は不安じゃなかった、自由になれる感じが強い。だから不安はあまりなかったっすね」と述べている。施設退所者は、社会生活後に孤独感が強まると推測される。しかし、退所直前は、規則やルールに拘束されやすい施設から出たい気持ちが強い。そのため、必要な能力や経済的見通しもないまま、社会生活を始め、その結果、経済的困難に陥る場合も少なくないという^{註9)}。A氏は、

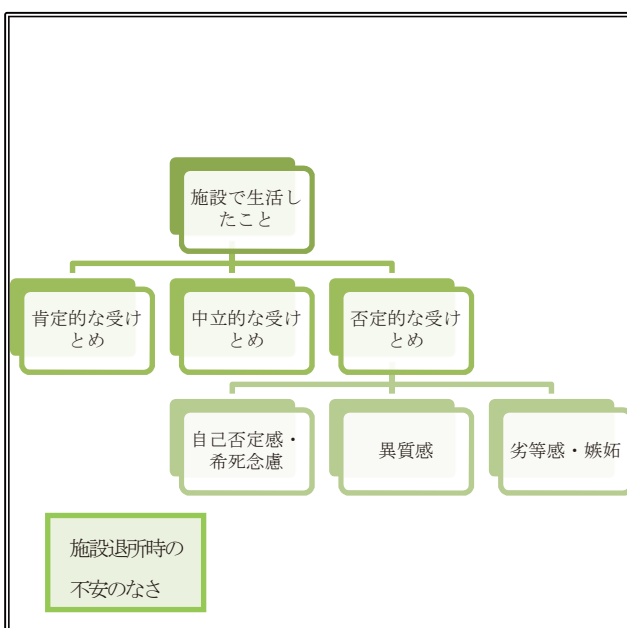
当事者を支援する活動をしていることもあり、「(退所時に)一人暮らしはどのようなものか、どのくらいお金がかかるのか、その知識を得てほしい」と言及している。

「施設退所時の不安のなさ」は、退所後のアフタケアを考えるうえで、施設経験者の心理の重要な点と考えられ、独立の項目とした^{註10)}。

まず、内なる心の支えであるが、①「音楽活動をあきらめずにやっていることが支え」と述べ、自らの生い立ちや児童養護施設における経験を歌詞や作曲をし、演奏活動を続けることに生きがいを感じている。A氏は、小学校低学年から施設暮らしを始めている。その頃、施設の友人らがスポーツをすることになじまず、学校生活のなかで出会ったのが音楽であった。施設で経験したこと、様々な思いを詩として書き記し、音に換えて創造的に表現している。自らの表現が施設で生活した同じような境遇の人々の気持ちを代弁し、社会に訴えていく活動になっている。また、②福祉関係の職務につき、同じ立場の人を助ける仕事をしている。こうした職業選択は、自らの経験を積極的に社会に還元し、他の人々の役に立てられる点で、存在価値を得ていると感じた。また、③20代に結婚をしており、伴侶も得た。子どもも誕生しており、新しい家族関係を作ろうとしていることも、生活の在り方を変える大きな転機になっている。以上の3点はA氏が面談で語った内容のなかで肯定的な受けとめをしている語りであり、内なる心の支えでもあろう。

②A氏の語りにおける否定的な受けとめ

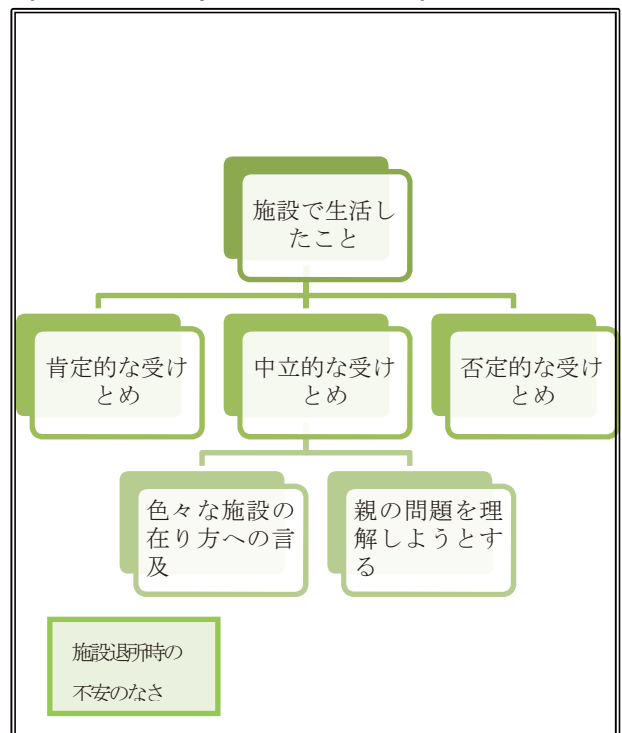
Figure2. The Negative acceptances on self-understanding in narratives(Mr.A)



ところが一方、A氏の場合、不安定な心の状態についても語られている。「施設に入るとは悪いことをした、少年院へ入ったように思った」、「ダメな方向になると、生まれてこなかったらよかった、自殺を考える」と述べている。うまくいかないといった事態に置かれたときに、自己否定、希死念慮になりやすい思いを率直に語ってくれた。また高校に入って、施設にいることを友人に隠すようになったことや、「自分は一般の人と違う、壁をつくってしまう」と述べ、これまでの調査結果でも指摘されているとおり、施設生活を一般とは違う、異質なものと捉えていることが窺えた。施設経験の有無にかかわらず、大勢の人間が人生の行き詰まりや危機において、希死念慮を抱くこともあろう。しかし施設経験者の特徴は、本人の都合ではない、施設入所をした余儀ない事情があるにもかかわらず、その生い立ちに結びつけて、そのことがあったために、「ダメなんじゃないか」と考えてしまいやすい。「他の家族がうらやましい」、「貧乏な暮らしの人に優越感を感じる」など人間であれば誰もが抱く劣等感や嫉妬の感情も、生い立ちを隠そうとする心情のため、心の奥底に封じてしまいやすく、否定的な感情に陥りやすいとも考えられる。

③A氏の語りにおける中立的な受けとめ

Figure3. The Neutral acceptances on self-understanding in narratives(Mr.A)



A氏は、両面的な感情の付与された語りだけではなく、事実をありのまま見ようとしたり、自分の経験を含めて状況を俯瞰したような内容をもつ語りが見られた。これ

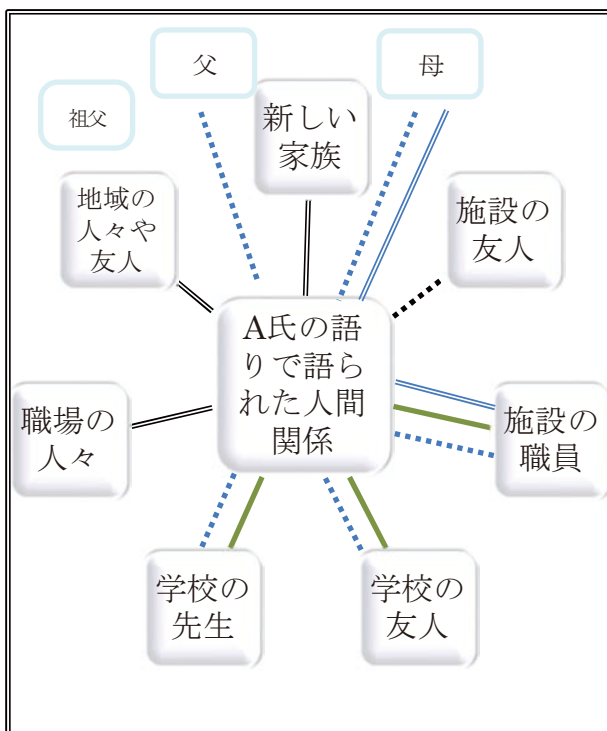
を中立的な受けとめと表札をつけた (Figure3)。

例えば、施設という場所に対しても「いろんな施設さんがある。いろんな家族がいるように、いろんな施設の在り方がある」と施設に対して偏った見方をせず、その多様な在り方を認める発言がみられた。また、母親に対しても、「育てられていないんです」と否定的な発言の後で、「(自分が) 親の立場になってはじめて、親はこういう問題があったとわかったんです…貧困ですよ、お金を稼ぐのが大変だった…」と親のこれまでの態度に対して、理解をしようとする語りが見られた。こうした語りは、虐待を受けた子どもが「虐待という事態を何とか理解しようとする子どもの認知的な努力」(西澤, 1994, 45 頁) であり、ネグレクトをしてきた親であっても、全面的に否定しきれない気持ちと考えられる。また、A 氏は現在、社会福祉の仕事に従事しており、当事者支援にも力を入れている。こうした立場によって、当事者の問題に対して客観的な見方をしようとする語りが生じたと考えられる。

このようにA氏は施設退所から10年以上の歳月を経て、施設で生活したことについて、客観的に眺め、それを理解しようとする中立的な受けとめが可能になってきたと考えられる。

④A氏の語りにおける支えとしての人間関係

Figure4 The interpersonal relationships in narratives(Mr.A)



次にA氏をこれまで支えてきた人間関係についてみてみよう (Figure 4)。この図における実線——は肯

定的な語りあるいは自己肯定感の獲得に影響を与えた関係、点線……は、否定的な語りあるいは自己否定感に影響を与えた関係、二重線——は、肯定や否定といった見方を超えて事実をありのまま認めたり、自分の置かれた状況を俯瞰する語りを表わしている。なお、関係を表わす直線は、語りにおける表現に基づき、過去や現在に築かれた対人関係の状態を表わすものではないことを断っておく。

支えとしての人間関係の具体的な内容についてみると、A氏は「しゃべらない子どもだった」と述べるが、幼少期から人に関わっていく積極性があり、施設の職員や友人だけではなく、学校の先生や友人、地域の人々など大勢の人々との関わりを持っていた。しかしながら、物理的かつ心理的守りは少ない環境であるため、A氏は、こうした人々と関わるなかで、情緒安定的な支えを得たり、あるいは却時には情緒不安定な影響を残した様々な経験を経て成長してきたことが明らかになった。

まず自信や自己肯定感をもたらしたと思われる人間関係から見よう。A氏は9歳まで母親からのネグレクトを受け、親の財布からお金を抜き、冷蔵庫をあさる生活をしていた。「(家は) 居心地が悪いので、街を徘徊していた」という。小学校の低学年で近所の店のお手伝いのバイトもして、そのうちに地域で「悪い友達ができたりした」と述べている。

しかし、たまたま近所に住んでいた「母親(の後ろ姿)と間違えたお姉さんに病気のとき面倒をみてもらったり」、「食堂の家族にごはんをつくってもらったりした」という。またその「食堂のお姉さんから音楽を教えてもらった」。このように食事の世話など家族に近似する関係で生活の場所を与えてくれた食堂の家族に対しては「今でも感謝している」。さらに小学生高学年のときに、出会った音楽の先生から「音楽の才能を認められたこと」が、自分自身に大きな影響を与えた。

一方、否定的な経験として語られた関係について、A氏は、「僕はしゃべらない子だった」ためか、小学校入学時に「担任の先生から張り手をされ」学校へ行かなくなったと語った。本人は「学校が(どのような場所か)よくわからなかった」という。9歳から施設に入り、学校に通えるようになり、「(学校で) 友達がすぐに来たのが救いだった」。一方で「同級生にウソばかりついて」「施設のことを言わなかった」。施設において、子ども同士の力関係があり、「先輩からの圧力が怖かった」し、「物を盗られることもあった」。施設の職員とは「悪いことをしたときにしか1対1の関係にならない」。よく調理場にいることが多く、「調理場の人がフランクに

関わられてよかった」。「施設の職員に頼れたのかどうかわからない」が、「(施設をでてから通勤途中で)施設にご飯を食べに行っていた。甘えすぎている。だからそれを(職員から)注意されたのは(自分自身の甘えに気づけて)よかった」と語った。

A氏は、こうした家族以外の人間関係において、自己肯定感の獲得に影響を与えた関係や、否定的な言動として語られた関係というように、両面性のある豊かな経験を持っていた。親からのネグレクトに受動的に耐えていたのではなく、幼少期から外に向かって関わっていた。こうした対人スキルや能力が、現在も福祉の仕事をしていく原動力や対人援助能力になっていると考えられた。

④A氏の「語られない語り」の特徴～両面的～

A氏の語りの過程を分析すると、A氏の自己像においても、人間関係においても、肯定的あるいは否定的な受けとめが為されてきた経験があると同時に、自分自身の経験を外から眺めて、そこで起こっていた事を客観的にありのまま理解しようとする語りが見られたことが特徴であろう。A氏の「語り」は、肯定面が強くなるか、否定面が強くなるかの違いはあっても、アンビバレントな葛藤を伝えている内容が多い。たとえ本人が良かったという経験を語っていても、そこに伝わりきれない辛く、隠しておきたい、明るみにだしにくい経験も潜んでいると面談者には感じられた。面談者は心にすぐに腑に落ちない不透明な印象や、傷ついているのではないかと想像される、複雑な思いを抱いた。

A氏の「語られない語り」の特徴として、①生い立ちに対する否定的な思い、②原家族、施設での生活、父母観や男女観など性に関わる未整理な経験、③頼りたくても頼れない葛藤という3つの要点が考えられた。

A氏は、母親のことを「一人の女性と見ています」と述べ、「孫も生まれているが、母親として頼りにできない」ことや今となっては、子どもが親の面倒をみる立場になっているが、「虐待してきたのに、その関係でなんやと思った」と腹立ちを述べている。また子育てについて「(両親が)しろといったから、(子どもが)失敗した。じゃなくて、自分で決断したんだから、自分の責任だよ。次に失敗しないようにするにはどうしたらいいか(を教える)それが子育てじゃないか」という見解も持っている。このように自立を強く意識しているのは、A氏が自立せざるをえない環境にも置かれていたことと無関係ではないと考えられる。だがA氏がネグレクトされていた生育環境は、本人の責任とは言い難い。しかしそれでも自己責任の重要性を感じるのは、自分でなんとか

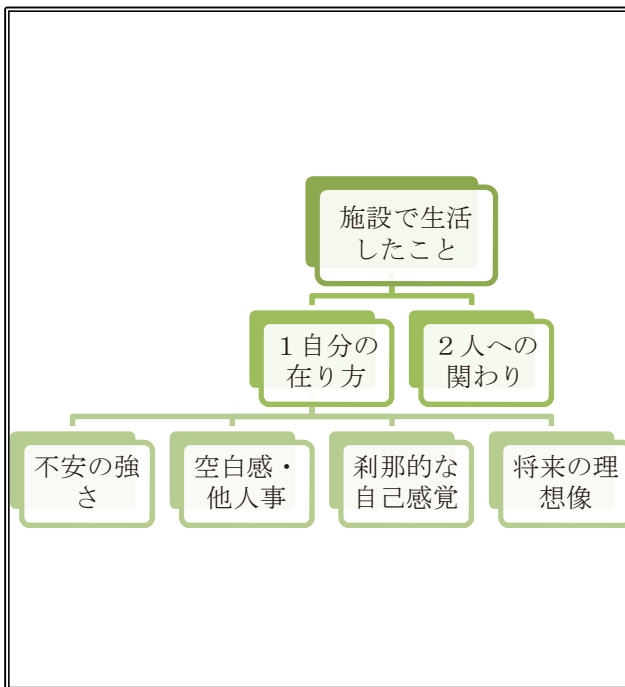
できなければ、誰も助けてくれないという危機意識があるからではないかと考えられた。また、父親に会ったことがなく、父親のモデルを経験できなかったことで、現在の自分自身の父親としての振る舞いにも悩みが生じている。また、あまり関わりのなかった祖父であるのに、祖父の葬式において涙を流せない自分に罪悪感を抱いてしまう。このように頼れないという葛藤、自立を強調する生き方は、A氏が幼少期に自分ではどうすることもできない環境に置かれていたことも関わっている。目の前の人を頼りにできなかつたら、自分は生きていけないのだというギリギリの思いに裏打ちされている。また母親像や父親像が持てない点に対して、言葉にはっきりと表現しているわけではないが、筆者には憤りを抱いていると感じられた。

なぜこのような憤り、未整理な経験、頼りたくても頼れない葛藤を語りにくいのか。芹沢(1997)は、「生まれてくる子どもは、自分が生まれるべきか否かを考えたり選んだりすることができない。また生まれてくる子どもは、自分を生む親を誰にすべきか選ぶことができない」(21頁)と述べる。そしてこうした何重もの不自由を背負っているという根源的な受動性を「イノセンス」(21頁)と呼んでいる。芹沢(1997)は、この不自由さは幾重にも強制されたという点ですべて暴力、拘束であると考えている。子どもがおとなになるためには、何重もの不自由を自ら選びなおさなければならない。そして、「親は子どもによるこの対抗暴力を受けとめ、肯定し、それらの不自由が実は自分の存在の根拠であるというように能動的な選びなおしを子どもが行なうことができる機会」を作ること、すなわち、子どものイノセンスを親が肯定していくことによって、子どもは世界と出会える契機となると説明している。筆者はA氏の「語り」が両面的にならざるをえないのは、この根源的なイノセンスを自分の親からしっかりと肯定してもらえなかった、言葉にならない思いがあるためではないかと考えている。

(3) B 氏の語りから見えてくるもの

①B 氏の語りにおける心の状態

Figure5 The mental state of mind in narratives (Mr. B)



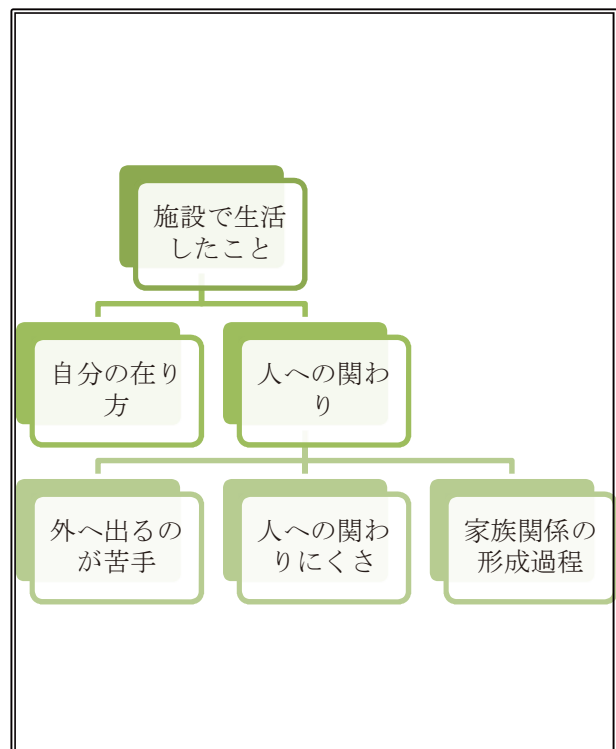
分析の結果、B 氏の心理と支えの特徴は、B 氏がまだ 10 代という自己を確立していくための発達段階にあり、「語り」の特徴も自分の在り方への言及と現在の自分と人に対する関係領域についての内容が多かった点にある (Figure5)。

まず、B 氏は、自分の在り方であるが、まず施設の退所は「家に帰りたい」という気持ちが強かったことが理由であり、高校進学についても、「(高校へ) 電車に乗っていくのはまだ一人やと不安やし…」と述べ、不安の強さが窺えた。「たまに一人でちょこんとどこかへいたり、その場にずっといない」という発言があり、本人がこれまで周囲と交わるよりも、一人で孤立しやすかったのではないかと想像された。さらに、現在の気持ちを尋ねても「自分のことはないんですね」、「何もないですね」、「ちっちゃい頃の記憶がないんで」といった空白感や記憶のなさ、「今が楽しすぎて、(将来のことを) 見れないというのがあるじゃないですかあ」など自分の課題として考えることができず、他人事のような言葉の遣い方をしてしまう傾向がみられた。自分の在り方についての言及の多くは、「家に帰りたい」気持ちから家族と暮らし始めた自分自身に対するものであり、社会との関係を考えることはまだ中心課題にはなっていないと考えられた。さらに、「今が楽しければ、それでいいか」といった利他的な自己感覚の一方で、「奥さんだけではなく、夫も料理できるみたいな、夫婦で支えていけるみ

たいな」家族を持ちたいという理想像があり、それに向けて家庭料理のテキストも購入したりしている。また教習所へ行って運転免許をとろうとしている。こうした将来の理想像ではあるが、そこへ近づくための一步一步の現実的な活動が B 氏の内なる支えになっている

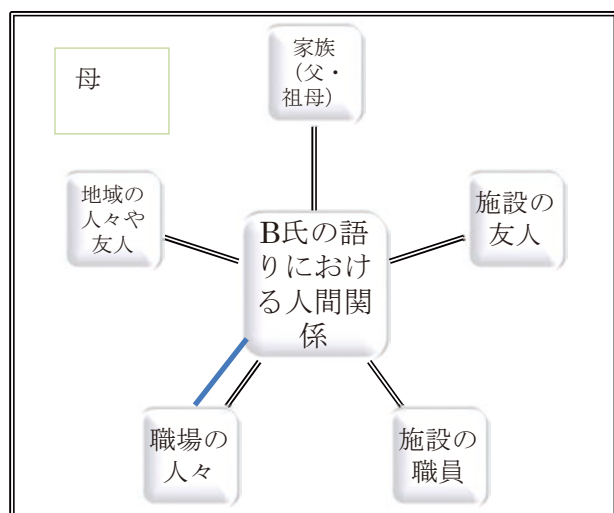
②B 氏の語りにおける内的な人間関係

Figure6 The internal relationships in narratives (Mr. B)



一方、人への関わりにおいて、「外へ出るのが苦手、家のなかにとずっといるんです」、「友だちが少ないというのもある」、「人づきあいが悪いほうなんで、自分から離れてしまう」、「一人で散歩とか行くんですけど、付き合っている子とかみたら、ええなあ」と語り、同世代の友達づきあいを望みながら、自分からは積極的に関わっていくことが難しい悩みを抱えている。まだ退所して 3 年しか経ていないため、家族とどこかへ出かけた時にも、家族に「何も言わずにちょこんと外へでてしまって、逆に心配をかけている」と述べている。「(家族と) あまり喧嘩はしない。だからお父さんがどう思っているかわからない」、「お父さんが帰ってくるまで(食事を) 待っとくみたいな(生活)」と述べ、家族と一緒に暮らすことはできているが、現在のところ、気持ちや本音のやり取りは、まだ十分とれてはいない様子が窺えた。家族との関係も再構築の過程にあると考えられた (Figure, 6)。

Figure 7 The external relationships in narratives (Mr. B)



③B氏の語りにおける外的な人間関係

次にB氏の支えとしての外的な人間関係であるが、Figure 7の通り、否定的な経験や影響を受けた関係だけではなく、肯定的側面についてもあまり語られていない。そのため肯定と否定ともいえないという意味で、中立的なニュアンスをもった話の内容が中心で、二重線 ———— で結ばれた語りが多くを占めた。職場の目上の人々はB氏に自己肯定感を与えているので、実線 ———— を加えている。

まず、支えについては「まあ、今は、親ですかね」と言い、生活の面で、また意識的には家族が大きな心の支えであると考えられた。また、「ほんまにうそをつけないとか、施設に入っていたということは言います」、「会社の人と会うだけで、やっぱ目上の人ばかりなので…親しくしてもらえるのが楽しい」と語り、施設で生活をしてきたことを理解してもらえたうえで、仕事を通して自分が認められることによって、生きる活力をもらっている。現在も施設の行事にも参加しており、B氏にとって、①父と祖母の家族、②職場の目上の人、③施設の職員や友人という3つの人間関係が心の支えになっていると考えられた。しかしながら、施設入所後、母親とは電話連絡を通したやり取りが主な関わりであり、具体的に直接的な関係についての言及はなかった。また、B氏が祖母との関わりについて、「お家において、年金の分でごはんをだしてくれたり…」と経済的な面での援助をもらっていることを挙げ、父親と一緒に生活していても、「お父さんがどう思っているかわからないっす、力の問題…こちらからも言わないし」といった言動も見られた。穿った見方をすれば、父親や祖母に向かってネガティブな感情などをぶつけるような関係性は十分ではなく、その感情は否認・回避されているのではないかと考えられ

た。様々な人間関係についての語りにおいても、差し違りのない、肯定とも否定ともいえない内容が中心となっている (Figure 7)。

④B氏の「語られない語り」の特徴～否認・回避的～

B氏の語りの過程を分析すると、いきなり「自分のことはないですね…この先、考えていなくて」、「とりあえず、暗いことを考えんこと思ったり、今と未来、何があったからとか、それは切り捨てるとするか」と述べ、自分自身や将来のこと、過去や母親についてもそこにある気持ちを否認したり、問題と直面することを避ける回避的な応答が多かったのが特徴と考えられた。

このような回避的な語りにおいて、面談者の胸を痛めるやり取りが生じた。面談中、B氏になぜ中学卒業後に専門学校へ1年行ってその職業になろうと思ったのか尋ねたところ、B氏は笑い、沈黙になってしまった。後でたまたま施設の職員と雑談するなかで、その職業はB氏の父親の職業でもあったことを知った。B氏は専門学校へ1年通ったものの、怪我をしたことをきっかけにその職業につくことを諦めて、現在パートの仕事をしている。そのことからB氏が目指そうとした職業は父親の職業だったことを「語らなかった」。筆者との対話においてB氏に「語られない語り」が生じた理由は、B氏の挫折感、父親への思い、将来の方向性がみえない不安など本人にとって核となる感情に触れる話題だったことが考えられる。B氏の職業や家庭像は、あこがれとして存在しているが、それを現実的な目標として考え、それを実現していくことに時間を必要としている。これは筆者の分析であるが、B氏が施設入所によって、実際の家族と接する機会が少なかったことが、身近な親の像を模倣して学ぶ機会を持ちにくくさせた。そのため、理想的な職業や家庭像を思い描いても、それを現実的に実行していく道筋が具体的に持ちにくい状況があるのではないかと考えられた。しかし、現在、少しずつその現実化への作業にB氏のペースで取り組みつつあると考えられた。

また、B氏は「付き合っている子とかみたら、ええなあ(笑い)」と述べる一方で、「友だちがいなくて寂しいとか、ぜんぜんないですね、だから今、生きているのが楽しいとか」「今が楽しすぎて、みれないというのがある」と言うように現状を否認する発言がある。B氏の「語られない語り」の特徴は、①生い立ちを振り返り、その気持ちを整理するなかで、現実的な自己を確立できるか、②家庭を含め、安心・安定できる世界を心のなかにつくっていくか、③特に同世代の人々や地域の人々に対して、自分から関わっていくか、気持

ちのやり取りをとおして人間関係でつくっていけるかについての 3 つの要点がある。これらはまた葛藤になりにくい混沌とした思いとして心の奥底にしまわれていると考えられた。このように B 氏は、「一段ずつからちよこちよこと、前の自分よりも考えている。逆に… (沈黙になり) …他の人を頼りにして相談できない、自分でなんとか努力しようみたいなことはあるんで」と自分自身の変化と他の人に頼りにくいという気持ちを語っていた。人間関係の悩みを抱えていても、人は当てにできないといった思いが心の底にあり、自発的に誰かに自分自身のことを相談しづらい面もあると考えられる。

5. 考察

(1) 児童養護施設経験者の心理について

A 氏と B 氏の語りの過程の分析によると、児童養護施設経験者の心理として、施設経験が与える最も大きな影響は周囲からの偏見を怖れており、そしてそれによって抱かされる自分の異質感にある。A 氏は高校から施設での暮らしを友人にも言いにくくなったと言い、「大変だったね、可愛そうだねと思われる」と述べている。また A 氏は、母親に対しても頼りたくても頼れない葛藤や自立を志向する子育て観を持っている。一方 B 氏は、「普通の人とわかりあえるような心理学を学びたい」などと述べており、自分自身は「普通の人ではない」と感じている。B 氏は「人づきあいが悪い嘛うんで、自分から離れて」しまうほど、対人関係に苦手意識や緊張感を持っている。このように①A 氏や B 氏が何か困ったことを抱えても、他者に対して語りにくい。A 氏の場合は母親に対して、B 氏の場合は父親や祖母、施設職員といった身近な他者に対しても遠慮があると考えられた。②また、何か壁にぶつかると自分の生い立ちを思い出し、家庭で育った子どもではなかったからという理由と結びつけて否定的な自己像になりやすい。このように、児童養護施設経験者は、親が子育てをすることが当たり前とする常識、家庭の幸せが人間の幸せとする価値観によって異質感を抱かざるを得ない状態に置かれている。日本は、教育、医療、福祉の資源を家族に責任を求める「家族依存社会」(西田, 2011) である。今回の調査を通して、児童養護施設経験者の「語り」を通して見えてきたことは、こうした常識や社会のシステムを自明とすることへの問い直しなのである。

(2) 「語られない語り」について

一体、「語られない語り」とは何か。筆者は、我々の存在 (抛り所) が揺さぶられるときに、心の深みから発

せられる、言葉の背後で経験されている、あるいは言葉にさえならない語りであると考えている。我々が自明としている社会の常識やシステムに適応している時には、このような「語られない語り」は覆い隠されているといえよう。病気、障がい、死別や離別、自然災害や突発的な事件との遭遇、あるいは児童養護施設経験のように、社会の常識やシステムによって自明に支えられた事態から、我々の存在がすっぽりと抜け落ちた時、我々の心に言いようもない「語られない語り」が噴出してくるのだ。「なぜ私は生まれたのか」「なぜこの家族が私の家族なのか」「なぜこのような経験をしなければならぬのか」といった問いが発せられる時、我々もその語りの地平に立っている。「なぜ私は生まれたのか」という問いに対してなかなかこれといった答えがでてくるわけではない。この不透明で捉えがたく、容易に答えが導き出せない課題だからこそ、我々は困難に立ち向かって生きようとするのだ。そして我々がこの世に生を受けた意味を見いだそうと自分自身を鼓舞激励し、自分にとって有意味な仕事をし、家庭を持ち、ある人にとっては創造的な表現活動を行うことで、将来に向かって希望を見いだそうとするのだ。生きることそのもの、人生そのもの、その生き様が語りである。そこにこそこの「語られない語り」が存在しているのである。

(3) 児童養護施設経験者に対する心理臨床的アプローチの要点

児童養護施設経験者に対する心理臨床的アプローチは、上記の「語られない語り」が発せられる地平に立って、その人に関わっていくことが求められると考えている。

本研究における「語られない語り」の特徴は、次の 3 点が挙げられる。

第 1 に施設入所前の家庭崩壊、施設入所による家族との分離、施設生活上の苦痛、退所後の孤立や周囲の偏見によって背負わされた経験や傷つきを伴った言葉にならない内的体験を示唆している^{註 1)}。A 氏は異質感や劣等感、B 氏は空白感や刹那感として味わっていた。

第 2 にその人自身の存在様式を象徴的に伝えている。A 氏が自分自身や様々な人々に対する両価的な経験として語られる語り、B 氏の対話のように否認や回路的に迂回されてしまう語りのように、その人の内外に対する関わり方や葛藤が全身で表現される語りである。Arthur W. Frank (1995/2002) は、ホロコーストの体験者やアルツハイマーにかかっている母親との生活について語る女性の例を挙げ、本当の混沌を現に生きている人々は言葉によって語るができないと述べている。傷ついた語

り手の言葉は、痛みの生々しさをほのめかすものの、傷はまさに身体そのものとしてある。このような語りは、媒介が存在しない直接的に生きることができるだけの「混沌の語り」（139 頁）であるとも説明している。筆者は、こうした直接的に生きることができるだけの語りは、「混沌」といった否定的側面だけを意味しないと考えている。A 氏のように施設経験を生かした創造活動や社会活動に取り組み、B 氏のように社会で自立するための道筋を少しずつ模索している。家族から離れて長年、施設で暮らすという不安定さのある環境に置かれても、自分自身を社会において意味ある存在として生きようと努力している。筆者が面談で受けた印象は、A 氏や B 氏が、母からのネグレクトや別離という苦難があったにしても、家族関係という枠を超えた他者の出会いや繋がりに支えられて、育ってきたという事実に対して心打たれるのである。「語られない語り」は、A 氏や B 氏との対話によって明らかになった、様々な問題を抱えながらも、逞しく生きてきた姿そのもの、A 氏や B 氏の心身の全体から伝わってくる存在そのものの語りであった。

第3にこのような「語られない語り」は、聴き手が目の前の人の訴えをわかろうとする心が関与して浮かび上がる語りである。ナラティブ・アプローチにおいて被面談者と面談者との関わりによって生まれる「共同生成の語り」（能智, 2008, 72 頁）「共同構築としての語り」（藤本, 2003, 58 頁）と指摘されてきた語りであると考えられる。本調査において心理士の筆者に対して A 氏が次のような語りを投げかけた。A 氏は、施設のなかで、子ども同士だけではなく、職員やボランティアとの関係においても性に関わる隠された問題があると述べ、そのことについて周囲の人々になかなか相談できないと述べた。そして「僕は（心理療法を）受けたことがないからわからない。でも心理士がついていることで少し（問題が）見えてくるのかなあ」と伝えた。これは明確に心理士の役割に言及しているわけではないが、心理士の仕事に対する期待を伝えている重要な「語られない語り」のメッセージであると受けとめている。

「語られない語り」は児童養護施設経験者といった特別な経験をした人だけの語りではなく、人間であれば誰しもが心の奥底に抱えている語りである。そのことを鑑みれば、本調査において面談者側に「語られない語り」という新たな視点を投入して、物の見方や捉え方を変化させることを促していることになる。心理療法において面談者と被面談者の双方の心と心を繋ぐと同時に、各人の在り方に揺さぶりをかける「第三のものとしての語り」（河合, 2013, 43 頁）ともいえる。

以上、本研究を通して、児童養護施設経験者の心理的な支えには、自己肯定感を支える人々との思い出や繋がりが、将来の自己像が重要であることが示唆された。児童養護施設経験者を支えていくには、語りの内容だけではなく、「語られない語り」を受け入れる他者の存在や場が重要である。したがって、語りを聴くことの臨時的な可能性は、児童養護施設経験者のもつ「語られない語り」との関わりを深め、支えようとする関係維持を目標にすることが重要であるという課題が示唆された。本研究では、施設経験者の語りを聴く場合の姿勢について明らかにできた。しかし、施設経験者が悩みを訴えられる場は少なく、アフタケアも各施設の尽力によって維持されているのが現状である（全国社会福祉協議会, 2009）。

そこで今後の方向性として、児童養護施設経験者の語りを聴く機会を持つことを可能な範囲で継続し、虐待を受けたり、施設経験を余儀なくされた人々がどのような関わりの中で支えをもらい、生きていく力を得られているのか、また多様な背景を抱える子どもに対して、我々がどのような心で受けとめて、その育ちを見守ったらよいかを明らかにしたい。さらに心理療法家が臨床実践を通して、子どもが生い立ちで受けた心の傷つきに対して如何に手当てができるのかを探っていきたい。

最後に、A 氏自身は面談のなかで、児童養護施設経験者への接し方について、次のように述べている。

「施設の子どもの親のことを言っちゃいけない…お互いに人間性が見えて、この人だったら話してもいいかなと思える関係性ができればいいかな…どんなアドバイスも求めていない…そういう人生を歩んできたんだね、認めてあげて、それだけでいいよと…それが少し支えになる、この人はわかってくれるかもしれないとなったとき、この人のために一歩がんばってみようかと思ったりするのかなあ…」

6. まとめ

本研究は、多様な背景を抱えた人々の育ちをどう支えるのかという観点から、児童養護施設経験者に対する心理臨床的アプローチを探ることを目的としている。そこで語りを聴くという方法を用いて面談を行い、2 事例の語りの過程の分析を行った。その結果、次の事柄が明らかとなる。(1) 施設経験者は、生い立ちに異質感を抱き、周囲の偏見を怖れている。(2) 施設経験者の語りには、両面的、あるいは否認、回避的な言動がみられた。それは面談者に腑に落ちない不透明さや傷つきとして感じられた。この明白に言語化されない語りを「語られない語り」と命名する。(3) 「語られない語り」は、社会の常識やシ

システムに適応できず、存在の根底が揺さぶられる時に、心の深みから発せられる語りである。それは「私はなぜ生まれたのか」という人間の根源的な問いに関わる語りである。また面談者の心が施設経験者の心に関与することで浮かび上がる。以上、児童養護施設経験者に対する心理臨床的支援の可能性は、「語られない語り」との関わりを深め、支えようとする関係維持を目標にすることが重要である。

謝辞；本論文をまとめるにあたり、インタビューを快諾し、ご自身の経験を筆者に一生懸命に語ってくださった A 氏と B 氏に深く感謝しております。

また本論文の推敲の際に、KJ 法の分析などご協力をして下さり、ご意見を賜りました臨床心理士に御礼申し上げます。

なお、本研究は、平成 25 年～平成 27 年の挑戦的萌芽研究「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」(分担)の研究成果の一部であります。関係者の方々にも深謝致します。

註 1) こうのとりのゆりかごとは、赤ちゃんポストとも呼ばれていた。2007 年より、熊本県熊本市の慈恵病院に設置された、養育できない赤ん坊を預けることのできる施のことである。

註 2) 神戸新聞 2014 年 8 月 4 日の記事で、厚生労働省の調査によると、2013 年度全国の児童相談所で対応した児童虐待の件数は、前年度比の 10.6%増の 7 万 3765 件(速報値)で過去最多を更新したと報告された。これは 1990 年度の集計開始以来、23 年連続の増加である。

註 3) 西田(2011)は、本書籍で、ネットカフェ難民調査(2007)の対象者 100 名のうち 1 割が児童養護施設の経験者であること、ワーキングプア調査(2009)でも対象者中の住居喪失経験者 68 名のうち 2 名がやはり施設の経験者であったという調査例を挙げている。「彼/彼女らは早期に学校から離れ、施設を出た後にはほとんど頼るべき資源をもたないままに不安定な仕事を転々とし、ついには住居を失い「ネットカフェ」での生活や路上生活に至るといった経験を重ねている」(197 頁)と述べている。

註 4) 児童養護施設経験者が抱く異質感や孤立感は、個人の心理的な問題ではなく、そこに関わる周囲の人々との関わりの中かで生じていると考えている。筆者は大学のフィールドワーク演習で、学生に児童養護施設のボランティア活動の経験の機会を与えている。学生らは、活動前に、施設の子どもに対して「可哀想」「不幸」「暗い」といった先入観を抱いていることが多い。しかし、実際

に子どもと接すると、そうしたイメージが払拭され、子どもの明るさや元気に驚いたという感想を述べる。学生らの反応からも、児童養護施設経験者に対して多数が抱いている偏ったイメージがあることが推測される。

註 5) 「語り」はナラティブ(narrative)の訳であるとする立場、「語り」と「ストーリー」(story)を区別(野家, 2005)する立場、両者を含めて「語り」とする場合もある(やまだ, 2000)。また、その場の発話だけではなく、自伝(autobiography)、日記やテキスト類も「語り」に含める立場もある。心理学、教育学、社会学、文化人類学、精神医学、歴史学、民俗学、言語学、文学など種々の隣接領域で取り扱われ、学際的な性格を持つ用語である。

註 6) 岡本(2012)は、心理臨床の場における調査研究の方法の有効性について論じ、「投影ドラマ法」を用いた継続的調査研究を行っている。調査そのものをプロセスと捉え、「表現者」と調査者との関係を考慮することで、「表現者」が自己のテーマを表現するなど心理臨床的な接近を持つことができると述べている。心理臨床学的な意義を見出すには、1 人のクライアントの語りや在り方だけではなく、そこに関わるセラピストの語りや在り方についても記録し、そこで生じる事象を検討していく個性記述的立場に立った研究が有効である。本研究においても、事例の語りの共通点や差異点をピックアップすることで、その一般的傾向を明らかにするという法則定立的立場ではなく、各事例における被面談者と面談者の語りのプロセスに注目することに焦点を当てた。

註 7) 川喜田晶子氏が主催するセミナー(霧芯館)にて、複雑で不透明なデータに対する豊かさや奥行きをもった分析に迫っていく KJ 法の本質について伝授をされる。

註 8) 見立てとは、「治療者(医師、カウンセラーを問わず)の意欲を含めて、もしもその人に自分が関わるとすれば、どのような角度から切り込み、どのような経過が予想され、予後はどうなるのか、といった見通し」(氏原, 2000, 16 頁)のこと。氏原(2000)によれば、この点で神経症か精神病かといった精神医学的診断だけではなく、共感的理解が重要であるという。

註 9) 森田喜治(2006)によれば、施設退所時に社会生活するために必要な知識、例えば、銀行の口座の作り方、カードの使い方なども知らずに借金を重ねる者も少なくないと述べている。

註 10) 本研究では、「中立的な受けとめ」の各項目と「施設退所時の不安のなさ」の独立項目については図で示したが、詳しく分析対象としていない。施設退所から時間が経った場合に「中立的な受けとめ」が可能になるのか

どうかなどについては今後の検討が必要であろう。また退所後間もない人々が同様に「施設退所時の不安のなさ」を経験しているかどうかとも更なる調査によって裏付ける必要がある。

註 11) 市川 (2006) によれば、施設入所児童の課題として、次の4つの苦痛があると言及している。①施設入所前苦痛、②施設入所時の苦痛、③施設入所中の苦痛、④施設退所前後の社会適応過程での苦痛を挙げている。

参考文献

Arthur W. Frank: *THE WOUNDED STORYTELLER* 1995. The University of Chicago Press, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手』2002. ゆみ出版

渥美公秀「語りのグループ・ダイナミクス—語るに語り得ない体験から—」大阪大学大学院人間科学研究科紀要 30号 2004. pp. 159—173

土居健郎「新訂 方法としての面接」1977. 医学書院

藤本愉「語りにおける「共同性」の検討」北海道大学大学院教育学研究科紀要 90号 2003. pp. 43—69

市川太郎「当事者からみた日本の社会的養護」望月彰編著『子どもの社会的養護—出会いと希望のかけはし』建帛社 2006. pp. 161—184

河合俊雄『ユング派の心理療法』2013. ミネルヴァ書房

川喜田二郎『発想法—創造性の開発のために』1967. 中公新書

国分美希「被虐待体験からの再生と成長を支えるもの—フォローアップ調査をもとに—」臨床心理学 1号 6巻 2001. pp. 757—763

子どもが語る施設の暮らし編集委員会『子どもが語る施設の暮らし1』1999. 明石書店

子どもが語る施設の暮らし編集委員会『子どもが語る施設の暮らし2』2003. 明石書店

森田喜治『児童養護施設と被虐待児』2006. 創元社

中村みどり他 施設で育った子どもたちの語り編集委員会『施設で育った子どもたちの語り』2012. 明石書店

西田芳正編・妻木進吾・長瀬正子・内田龍史『児童養護施設と社会的排除』2011. 解放出版社

西澤哲『子どもの虐待』1994. 誠信書房

能智正博「失語症の<語り>を聴くこと」pp. 51—78 やまだようこ編『人生の病いの語り』2008. 東京大学出版会

やまだようこ編『人生を物語る 生成のライフストーリー』2000. ミネルヴァ書房

野家啓一『物語の哲学』2005. 岩波現代文庫

岡本直子「心理臨床のプロセスをとらえる調査モデルの

可能性」立命館人間科学研究 25号 2012. pp. 33—45

奥山眞紀子・武藤素明他「《シンポジウム》メディアと虐待(前編) —『明日、ママがいない』が投げかけたもの—」子どもの虐待とネグレクト 第16巻第2号 2014. pp. 170—185

斉藤嘉孝「児童養護施設退所者へのアフターケアの実践—全国施設長調査の結果をめぐる考察—」西武文里大学研究紀要 13. 2008. pp. 49—54

芹沢俊介『現代<子ども>暴力論』1997. 春秋社

Sullen Murray, John Murphy, Elizabeth Branigan, Jenny Malone: *After the Orphanage: Life beyond the Children's Home*. 2012. New South Wales Univ.

東京都福祉保健局編『東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書』2011. 8月

両見志麻「児童養護施設卒園生へのナラティブ・アプローチ—施設で育ったわたしの物語—」武蔵野大学大学院紀要第5号 2005. pp. 99—112

内田龍史「児童養護施設生活者/経験者のアイデンティティの問題」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』2011. 解放出版社 pp. 158—177

氏原寛・成田義弘共著『診断と見立て』2000. 培風館

やまだようこ編『質的心理学の方法—語りをきく—』2007. 新曜社

渡井さゆり『大丈夫 がんばっているんだから』2010. 徳間書店

全国社会福祉協議会編『子どもの育みの本質と実践』による調査(「児童養護における養育のあり方に関する特別委員会報告書『この子を受けとめ、育むために—育てる・育ちあういとなみ—』」2009.

(平成 26 年 9 月 30 日受付)